



## Kobe Shoin Women's University Repository

Title	Wh 構文の解釈と韻律構造—佐賀方言と東京方言の対照— The interpretation and intonation structure of wh-constructions in Tokyo and Saga
Author(s)	西垣内泰介・日高俊夫 (Taisuke Nishigauchi · Toshio Hidaka)
Citation	神戸松蔭女子学院大学研究紀要言語科学研究所篇 Theoretical and applied linguistics at Kobe Shoin , No.16 : 99-115
Issue Date	2013
Resource Type	Bulletin Paper / 紀要論文
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

# Wh 構文の解釈と韻律構造—佐賀方言と東京方言の対照—\*

西垣内 泰介・日高 俊夫

神戸松蔭女子学院大学 言語科学研究所

gauchi[at]shoin.ac.jp・tossy.tp[at]gmail.com

---

## The interpretation and intonation structure of *wh*-constructions in Tokyo and Saga

Taisuke Nishigauchi・Toshio Hidaka

Shoin Institute for Linguistic Sciences, Kobe Shoin Women's University

### Abstract

(1) の Wh 疑問文は、東京方言では多義性があり、yes-no 疑問文と Wh 疑問文の解釈が可能である。

(1) ナオヤはマリが誰に会ったか知りたがっているの？

他方、無アクセント方言のひとつである佐賀方言では(1)は yes-no 疑問文の解釈のみが可能である。

本発表では、(1)の東京方言における多義性を焦点イントネーション(FI)(Wh要素が韻律上のプロミネンスを持ち(P焦点化)、以後の音調が低く抑えられる)と関連づけて考える。佐賀方言では(1)に相当する文はFIの韻律特徴を示さない。

我々はこの違いを(2)の含意関係の有無によって捉える。

(2) Wh要素の焦点素性[+F]の解釈が[+WH]解釈の必要条件である。

東京方言では(2)によって[+F]の解釈がなければ[+WH]解釈がない。他方、佐賀方言はそのような含意関係が関与しない。この仮定に関連して、両方言における「Whの島」制約の強さなど統語的現象を考察する。

---

\*本論文は日本言語学会第143回大会で口頭発表した内容に基づいている。本論文で使用するイントネーション曲線の表示は、東京方言については松田謙次郎氏、佐賀方言については日高俊夫の発音を入力としてPraatを使用して作成した。音源の取得、処理の全般にわたって阿部雄一郎氏の協力が不可欠であった。本研究の一部は、日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(B))「焦点・スコープ現象の統語・意味論的分析と音声実験・コーパス調査による検証」(平成21年度～平成24年度、研究代表者:西垣内泰介、課題番号:21320084)による援助を受けている。

The present paper is an analysis of question sentences in which a *wh*-phrase appears in a complement interrogative clause. In Tokyo dialect such sentences are ambiguous allowing the *wh*-phrase to have the matrix scope resulting in a *wh*-question interpretation, as well as the *yes-no* question interpretation in which the *wh*-phrase has scope in the complement clause. We consider this problem in terms of the Focus Intonation, by which the *wh*-phrase bears metrical prominence, with the pitch of the portion to the right being lowered. While Tokyo exhibits the FI, Saga does not. We discuss this contrast in terms of the implication relation between the assignment of FI and the interpretation of the scope of the *wh*-phrase.

キーワード: Wh のスコープ, 「Wh の島」制約, 韻律構造, 焦点イントネーション (FI)

Key Words: *wh*-scope, the *wh*-island condition, metrical structure, Focus Intonation

## 1. 解決すべき問題: Wh 疑問文における解釈の違い

Takahashi (1993) の観察では、東京方言において (1) を (「書かれた文」として) 解釈すると Yes/No 疑問文としても Wh 疑問文としても解釈され、多義性がある。Yes/No 疑問文として解釈されれば、適切な返答は「はい、知りたがっています」あるいは「いいえ、知りたがっていません」のようになり、Wh 疑問文として解釈されれば、例えば「拓也にです」等というような答え方が適切な返答となる。

### (1) 東京方言

ナオヤはマリが誰に会ったか今でも知りたがっているの? → Yes/No 疑問文, Wh 疑問文

一方、佐賀方言においては、東京方言の (1) に相当する (2) の文には東京方言のような多義性は存在せず、Yes/No 疑問文としてしか解釈されない。

### (2) 佐賀方言

ナオヤはマリがだいに会うたか今でん知りたがととと? → Yes/No 疑問文の解釈のみ

このような両方言での解釈の違い、すなわち多義性の有無は両方言のどのような性質の違いから派生するものだろう。本論文ではその疑問に対する答として、両方言の韻律構造と、それを引き起こす素性解釈の違いが要因となっているという分析を示す。また、その分析に基づいて、Wh に関連する他の現象が説明可能になることを示していきたい。

**Question:** このような解釈の違いが生じる原因、メカニズムは何か?

**Answer:** 佐賀方言と東京方言の韻律構造の違いと、それを引き起こす素性解釈における違いが上記解釈の違いを生み出している。

具体的な議論に入る前に、本論文が基盤とする理論的背景と、それに関連する両方言における基本的な事実の確認をしたい。

## 2. 理論的背景と本論文の主張

### 2.1 Focus Intonation

まず、東京方言における (4) と (5) の文のイントネーションの違いを参照されたい。(5) では「何を」の部分が高く発音される、つまり韻律的プロミネンスを持ち、さらにそれに後続する部分の韻律が (4) に比べて低く抑えられる。

この韻律構造を、Ishihara (2004) は Focus Intonation と呼んでいる。

#### (3) *Focus Intonation (FI) in Japanese*

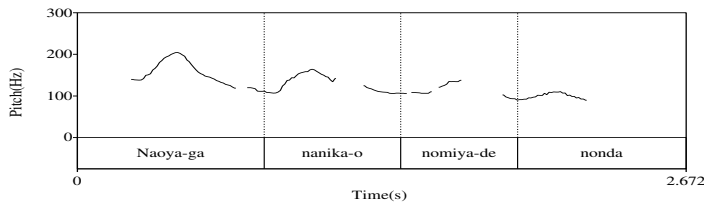
- a. **P(rosodic)-focalization** The  $F_0$  peak of a narrowly focused phrase is raised.
- b. **Post-FOCUS reduction (PFR)** The  $F_0$  peaks of the material after the P-focalized phrase is lowered. (Ishihara 2004: 79)

つまり、(5) では、焦点を担う「何を」が Prosodic Focalization を受け (4) の「何か」より高く発音され、その後に Post Focus Reduction (PFR) が起こる。

東京方言

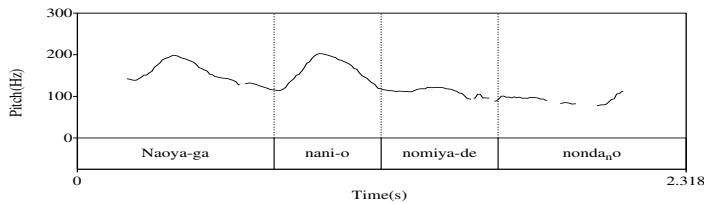
#### (4) *Non-interrogative sentence*

ナオヤが何かを飲み屋で飲んだ。



#### (5) *Wh-question*

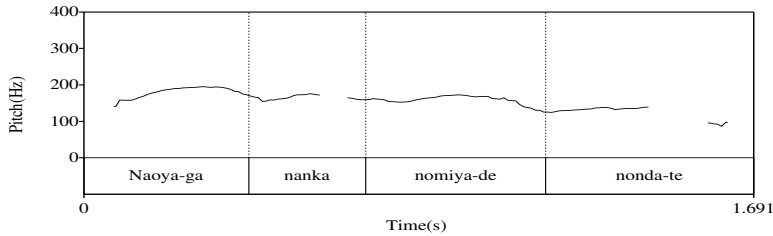
ナオヤが何を飲み屋で飲んだの？



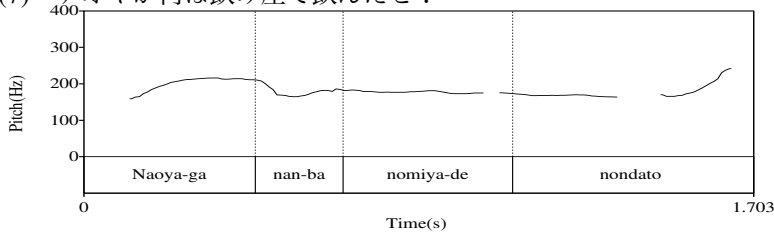
一方、佐賀方言における (4), (5) に相当する文の韻律構造は、東京方言と顕著な違いがある。

佐賀方言

- (6) ナオヤが何か飲み屋で飲んだ (て)。



## (7) ナオヤが何ば飲み屋で飲んだと？



いわゆる「無アクセント方言」である佐賀方言においては、文全体に渡って音の高低差が少ない。また、原則として Wh 要素が非 Wh 要素と比べて高く発音されることがなく、文末が上がる以外は Wh 要素後の音調も非 Wh の文と大差ない。つまり、佐賀方言における上記の文は FI の特性を示さないということになる。

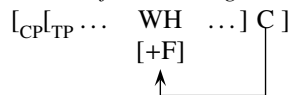
☞ 佐賀方言(無アクセント方言)は、FI の特性を示さない。

以上、佐賀方言と東京方言の基本的な韻律構造の違いを観察した。次節では、東京方言において FI が具現する理論的メカニズムとして Ishihara (2004) を紹介し、それを下敷きにして本論文の主張を述べる。

## 2.2 本論文の主張

Ishihara (2004, 87) によれば、Wh 要素が担う焦点素性 [+F] は補文標識 C によって派生的に与えられ、それが PF における焦点イントネーション FI と、LF におけるスコープ解釈に帰結をもたらす。(Ishihara, 2004)。

## (8) FOCUS feature assignment by C (Ishihara, 2004, 87)



つまり、東京方言においては、C は Wh 要素に F 素性を付与し、F 素性が PF で解釈されて FI が形成される。さらに F 素性は LF で Wh 要素が SpecFP に移動し焦点要素としての解釈をもたらす。このように、東京方言では F 素性が Wh の LF, PF の両方における解釈に密接に関わっている。他方佐賀方言は東京方言に比べてシンプルな音調パターンを生成する(しか生成できない) PF システムであり、Wh の解釈と PF における焦点の解釈が連動しない。

東京方言 F素性がLF, PF両方においてWhの解釈と焦点の解釈に密接に関わっている。  
 佐賀方言 Whの解釈と焦点の解釈が連動しない。

われわれは、東京方言を含む多くの方言で次のような含意関係が存在すると考える。

(9) Wh要素の素性[+F]の解釈が[+WH]解釈の必要条件である。([+WH] → [+F])

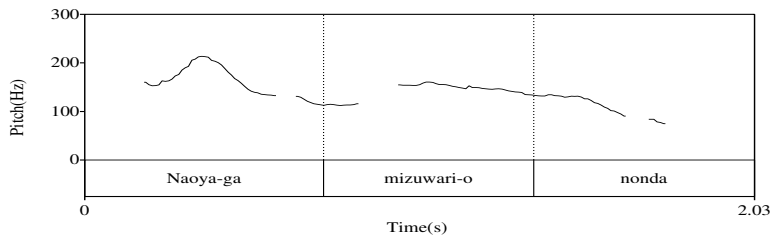
対偶により、東京方言など(9)が成り立つ方言では、PFにおいてWh要素の[+F]が解釈されてFIとして実現しなければ、LFにおいて[+WH]が解釈されないということである。一方、Whを含む文においてP焦点化もPFRも起こらない(つまりFIを示さない)佐賀方言では(9)の含意関係がなく、[+WH]の解釈は[+F]とは無関係になされる。<sup>1</sup>

ここまで、CによるF素性の付与という観点からFIを説明してきた。これまでに述べてきたように、佐賀方言においてはWh要素を含む文がFIの特性を示さないという事実はあるが、焦点を表す語句がP焦点化をまったく受けないという訳ではない。

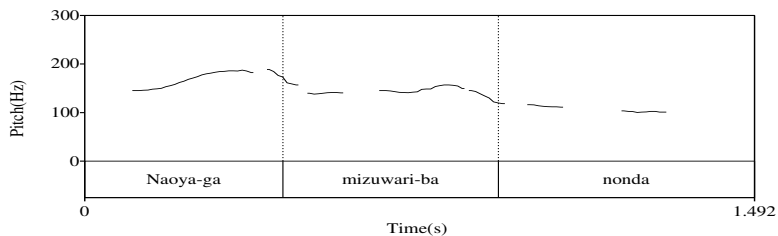
一般に疑問文に対する答の中心となる要素は焦点としての解釈を受けるとされるが、佐賀方言の場合でも東京方言と同様、通常そのような焦点要素は韻律的プロミネンスを担う。まず、通常の文のイントネーションを見てみる。

#### 佐賀方言におけるP焦点化

(10) 東京方言：ナオヤが水割りを飲んだ。



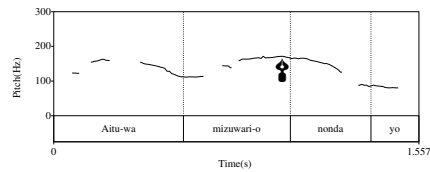
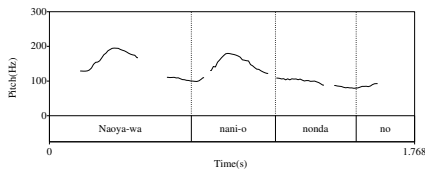
(11) 佐賀方言：ナオヤが水割りば飲んだ。



<sup>1</sup>このことが佐賀方言に(8)のプロセスが存在しないことを意味するのか、(8)は存在するが当該の構文の派生に用いられないのか、この論文では考察しない。

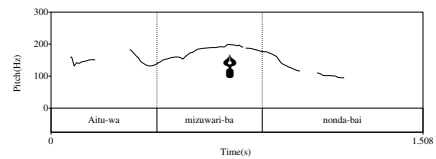
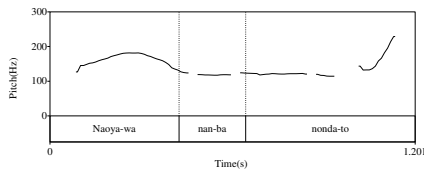
(12) ナオヤは何を飲んだの？

あいつは水割りを飲んだよ。



(13) ナオヤは何ば飲んだと？

あいつは水割りば飲んだばい。



(12), (13) が示すように、いずれの方言においても焦点の「水割りを」の部分が高く発音される。

Wh 疑問文の wh 要素は東京方言では (8) によって派生の過程で [+F] 素性を与えられ、それが PF で解釈されるが、佐賀方言では (8) による付与を解釈する PF のシステムがないという差異によって両方言の疑問文の違いがとらえられる。ところが、wh 疑問文に関する「答」の文では、いずれの方言においても焦点要素が P 焦点化を受けるという事実を考え合わせると、wh 要素に相当する答えを与える構成素つまり「水割りを」は、wh 要素そのものとは異なり、F 素性を C によって付与されるのではなく、疑問文と答えの文の構造的平行性に基づいて、疑問文で WH 要素が占めていた位置に現れることによって、Numeration の段階から [+F] が付与され、その [+F] がいずれの方言においても焦点イントネーションとして実現するものと考えられる。

このことは、無アクセント方言で焦点に関わる現象にピッチないしアクセントがまったく関与しないわけではないのであり、佐賀方言の wh 構文が FI 特性を示さないのは単にこの方言でピッチが関与しないからとは言えないことを示す、重要なポイントである。

以上、本節では佐賀、東京両方言における FI の違いを観察し、その違いを Ishihara (2004, 87) の「C による F 素性の付与」およびそれに伴う PF システムの違いに基づく「素性解釈の含意関係」という観点から説明できることを示唆した。

以上のメカニズムに基づき、次節では両方言において Wh 要素を含む文の韻律構造と素性の付与がどのように関係しているのかを具体的に見ていく。

### 3. Wh 疑問文と意味解釈

#### 3.1 東京方言の場合 – Short EPD, Long EPD と F 素性の付与

この節では、東京方言の疑問文 (14) に関して、その韻律構造と解釈の関係を考察する。ここで重要な役割を果たすのが Deguchi and Kitagawa (2002) が Short EPD (Emphatic

Prosody) および Long EPD と呼ぶ音調パターンである。Short EPD とは、(14) が示すように、Wh 要素の後に低く発話され、補文の発話後にリセットが起こり再び高い部分が現れるというものであり、この場合意味解釈としては Yes/No 疑問文が対応する。一方、Long EPD では、Wh 要素の後は文末の「の」の直前までずっと低く抑えられ、「低い部分が長く続く」韻律パターンのことを示す。この場合、この wh 要素は文全体をスコープとしてとり、疑問文は Wh 疑問文として解釈されることになる。

具体的なメカニズムを Ishihara (2004) のフォーマットで記述すると、補文内で [+F] 素性が付与される場合、補文の C 主要部「か」が補文の TP 内の wh 要素に [+F] を付与し、FI が補文をその領域として適用する。この時 Short EPD が実現して疑問文全体は Yes/No 疑問文として解釈される。これが (14a) の韻律特性と wh 解釈を説明することになる。

一方、主文の C 主要部である「の」が補文の TP 内の wh 要素に [+F] を付与し、FI が主文をその領域として適用する場合には Long EPD が実現して疑問文全体が Wh 疑問文として解釈される。これが (14b) となる。<sup>2</sup>

- (14) a. ナオヤはマリが だ れに会った か知りたがっているの？  
 (Short EPD; Emphatic Prosody → Yes/No)
- b. ナオヤはマリが だ れに会った か知りたがっている の？  
 (long EPD → Wh)

ただし、補文内の wh が主文の C 主要部から [+F] を付与されるためには、wh が何らかの移動をして一旦 TP の外に出る必要がある。上位の節の C 主要部から下位の節 CP 内部の wh にアクセスすることは Phase 不可侵条件 (Phase Impenetrability Condition, PIC, Chomsky (2000)) の違反となるからである。

- (15) ... [CP ... [CP [TP ... WH ...] C] ... C ]  
 [+F]

Phase 不可侵条件 (Phase Impenetrability Condition, PIC, Chomsky (2000)) 違反

Wh 要素がかきまぜによって TP に付加されると、付加された wh 要素は TP の一つの切片 (segment) にのみ含まれることになり、TP には支配 (dominate) されず下位の C 主要部の補部領域 (complement domain) にはなくなり、上位の C 主要部からのアクセスが可能となる。

- (16) ... [CP ... [CP [TP WH [TP ... (WH) ...] C] ... C ]  
 [+F]

この wh 要素のかきまぜは音声的帰結をもたらす必要はなく、移動先、移動元いずれが発音されてもよいと仮定する。

<sup>2</sup>Deguchi and Kitagawa (2002) の実際の分析は C ではなく I に E と呼ばれる解釈不可素性があり、これが probe として IP 内の wh 要素にある解釈可能素性 E を goal とする一致の関係を確立する (E-Agreement)。



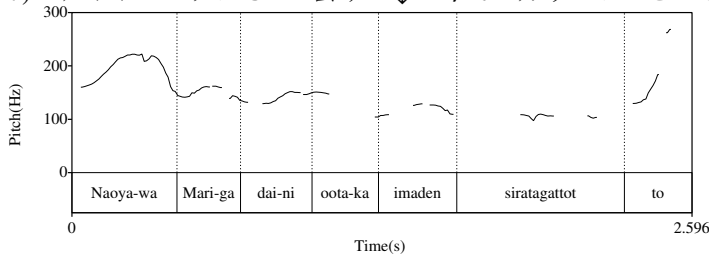
これによって、C 主要部はかきまぜによってできた連鎖 (chain) の主部 (head) すなわち移動先の wh に [+F] を付与することができる。<sup>3</sup>

このようにして主文の C 主要部から補文内の wh 要素に対して [+F] が付与されたときに長距離の領域を含む FI が形成され、最終的に (14b) に見られる Long EPD の韻律パターンが実現する。

### 3.2 佐賀方言の場合

東京方言と違い、佐賀方言では、(14) に相当する文には基本的に 1 つの音調パターンしかなく、Wh 要素は韻律的プロミネンスを持たず、文頭から補文の終わりまで高く保たれ、その直後に幾分低くなる。

(17) ナオヤはマリがだいに会うた↓か今でん知りたがととと？



### Wh 素性の照合

(18) ナオヤは [<sub>CP1</sub> マリがだいに会うたか] 今でん知りたがととと？

佐賀方言には (9) の「[+WH]→[+F]」という含意関係がないので、PF では Wh 要素に関して特に顕著な操作は起こらず、Wh のスコープ解釈は統語構造において最も近い探査子 (probe) (ここでは埋め込み文の C である「か」と一致することによってのみ得られる。つまり、Wh 句が CP 指定部に移動し、wh 素性が照合されれば、その時点で Wh の解釈に関わる派生は収束することになり、FocP 指定部へのさらなる移動は起こらない。

## 4. 佐賀方言におけるかきまぜの問題

佐賀方言は語順に関わる現象についても東京方言などと異なったふるまいを見せる。

### 4.1 優位性条件？

複数の wh 要素を含む文では、東京方言では単文の中で wh 要素どうしの相対的位置は比較的自由であり、(19) のように wh 要素の語順をかきまぜによって入れ替えても多少ベアリスト解釈に影響が出るものの文法性に問題が出るほどの変化はない。

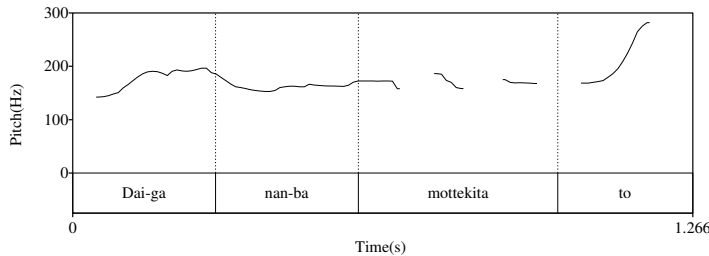
<sup>3</sup>Deguchi and Kitagawa (2002) では、wh 要素が E Agreement の結果スペルアウト後 (covert) に SpecIP へ (「表記上」) 移動するとしている。

## (19) 東京方言

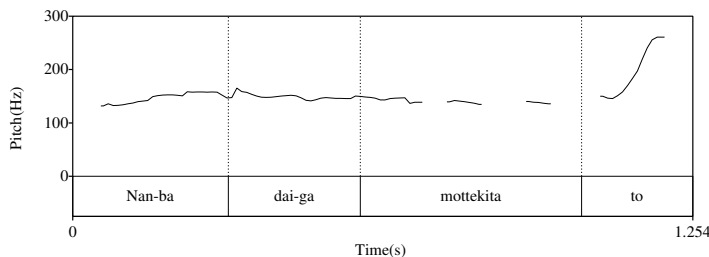
- a. 誰が何を持ってきたの？  
 b. 何を<sub>i</sub>誰が<sub>i</sub>持ってきたの？

他方、佐賀方言では複数の wh 要素を含む文でかきませによって wh 要素の相対的位置を変えると容認度に変化が生じる。次の文は複数の wh 要素を含む基本語順の疑問文とそのイントネーション表示である。

## (20) 佐賀方言: だいが何ば持ってきたと？



次の文 (21) のようにかきませによって語順を変更すると、ペアリストの解釈が不可能となり、そのことによって話者による容認度が低くなる。<sup>4</sup>

(21) 佐賀方言: ?\*何ば<sub>i</sub>だいが<sub>i</sub>持ってきたと？

一見すると「優位性条件」(superiority) の効果が佐賀方言の (21) にはあるように見える。あるいは、佐賀方言ではかきませという操作そのものが許容されないのだろうか。次にこれと一見矛盾すると思われる現象を観察する。

## 4.2 Wh 節からの移動

Saito (1989) は次のような文の発音される形式で wh 要素が補文の C 主要部に c 統御されていないにもかかわらず容認可能な文となる現象について考察している。

<sup>4</sup>(21) を容認可能な文とするためには「何ば」と「だいが」の両方を強く高く発音する必要があるが、その場合でもペアリスト解釈はしにくく、「誰かが何かを持ってきたらしいが、一体誰が何を持ってきたのか？」という強い疑問や問い質しの意味となる。逆に、通常の語順なら、このイントネーションでもペアリストの解釈は可能である。

(22) どの本を<sub>i</sub>ナオヤは [マリが<sub>t<sub>i</sub></sub>図書館から借りだしたか] 知りたがっている。

Saito (1989) はこの現象から、かきまぜによって移動された wh 要素が LF において移動される以前の位置 ( $t_i$  の位置) で解釈されると考え、このようなかきまぜの適用を「意味的帰結を持たない移動」(semantically vacuous movement) と読んだ。

我々にとって興味深いことに、(22) に相当する佐賀方言の文 (23) は容認性が低くない。

(23) どの本ば<sub>i</sub>ナオヤは [マリが<sub>t<sub>i</sub></sub>図書館から借りだしたか] 知りたがとる (て)。

前節の観察では (21) に見られるようにかきまぜに対する制約が強いように思われた佐賀方言が (23) のようなかきまぜを容認するのはどうしてだろう。我々は、佐賀方言のかきまぜには次のような制約があると考ええる。

(24) 佐賀方言

かきまぜは意味的帰結を持つてはならない。(Scrambling must be semantically vacuous.)

この仮説が統語的操作の上で意味することは、かきまぜが X の TP への付加であると仮定し：

(25) ...X<sub>2</sub> [<sub>TP</sub>...X<sub>1</sub>...]

X の発音が X<sub>2</sub> の位置でなされても、LF での解釈は X<sub>1</sub> でなされなければならないということである。<sup>5</sup>

前節で見た (21) では基本語順でなら得られるペアリスト解釈がかきまぜの適用によってえられるなくなるという意味的帰結が存在し、これによって (21) が容認性が低くなると考えられる。複数 wh 要素を含む文の解釈とかきまぜについては次節で分析を提示する。

佐賀方言のかきまぜに対する制約 (24) は次のような現象から支持をうけると考えられる。

Takahashi (1993) は (26) のような wh 節をこえたかきまぜが (東京方言において) およぼす意味的变化について論じている。Takahashi (1993) の判断では、Wh 要素が補文内部で発音される (26a) では Yes/No 疑問文と wh 疑問文の 2 通りの解釈があり、(26b) では wh 疑問文の解釈のみが可能であるとしている。このことから Takahashi (1993) は (26b) に見られる左方移動は S 構造以前に適用する wh 移動であるという主張をしている。

<sup>5</sup>Saito (1992) の言い方に従えば、佐賀方言のかきまぜはすべて A' 移動であることになる。Saito (1992) の分析では短距離 (同一節内) のかきまぜは移動先が意味解釈に関与するとして A 移動の性質を持つと主張している。その根拠の一部をなしているのは次のような対比である。

- (i) a. ?\*そいつの母親が誰をきらってるの?  
b. ?誰をそいつの母親がきらってるの?

かきまぜを受けた (ib) では移動先にある wh 要素が代名詞「そいつ」を c 統御するため (ia) よりも容認性が高くなる。しかし、日高の観察では (ib) に相当する文は佐賀方言では容認性が低い。この事実も我々の佐賀方言に関する仮説 (24) を支持するものである。

また、(ii) のように Saito (1992) の分析に矛盾する事実も存在する。

- (ii) おたがい<sub>i</sub>を彼ら<sub>j</sub>が<sub>t<sub>i</sub></sub>尊敬している。

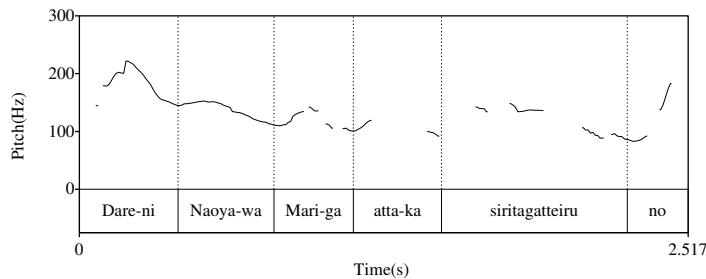
この文では照応形「おたがい」は移動元  $t_i$  の位置で解釈される必要があり、このかきまぜは A' 移動の性質を持つことになる。

## 東京方言

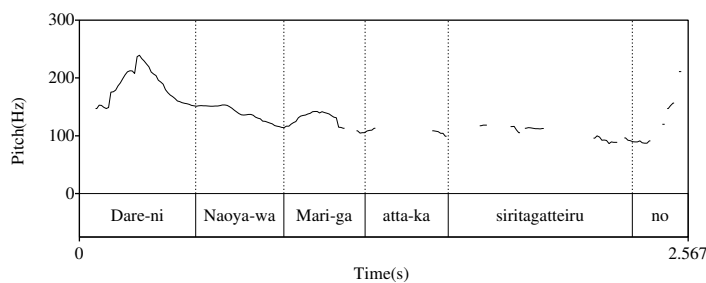
- (26) a. ナオヤはマリが誰に会ったか知りたがっているの?(=1)→Yes/No (Short EPD), Wh (Long EPD)  
 b. 誰にナオヤはマリが会ったか知りたがっているの?→Yes/No (Short EPD), Wh (Long EPD)

しかし、Deguchi and Kitagawa (2002) は (26a) の多義性は韻律パターンと対応しており、SEPD のイントネーション・パターンでは Yes/No 疑問文、LEPD では wh 疑問文の解釈が得られると観察し、(26b) においても SEPD, LEPD のイントネーション・パターンがいずれも可能で、それらに対応して Yes/No, wh 疑問文のいずれの解釈も可能であるとしている。我々の直感もこれと一致している。

- (26) b'. 誰にナオヤはマリが会ったか知りたがっているの? (Yes/No, Short EPD)



- (26) b''. 誰にナオヤはマリが会ったか知りたがっているの? (WhQ, Long EPD)

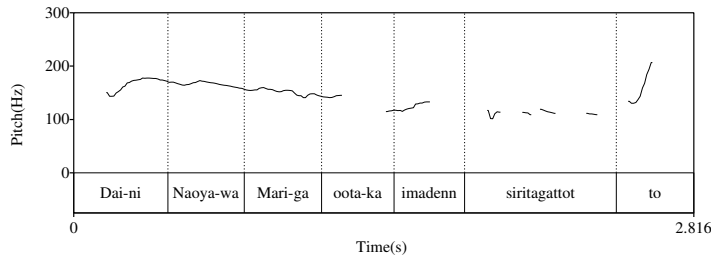


では、佐賀方言ではどうだろう。(27)の例文を考えてみよう。

## 佐賀方言

- (27) a. ナオヤはマリがだいに会うたか知りたがととと?(=17)→Yes/Noのみ

b. ?だいにナオヤはマリが会うたか知りたがととと？ → Yes/No のみ



かきまぜを適用して wh 要素が疑問補文を超えて文頭にあらわれる (27b) は通常のイントネーション (Wh 要素がプロミネンスを担わない) では若干容認性が落ちるものの、非文法的と判断されるほどではない。より重要なことは、(27b) は 1 つの解釈のみが可能であり、その解釈は Yes/No 疑問文の解釈である。

(27b) が 1 つの解釈しかないことは、佐賀方言のこの文には 1 つの韻律パターンのみが可能であることから、韻律と意味解釈の対応関係を支持する事実と考えられる。さらに、その唯一可能な解釈が wh 疑問文としての解釈ではなく Yes/No 疑問文の解釈であるということは、佐賀方言のかきまぜが意味的帰結を持たないという (24) の仮説を支持するものである。

## 5. 複数 wh 要素を含む疑問文とかきまぜ

この節では、4.1 節で観察した複数 wh 要素を含む疑問文に関する東京方言と佐賀方言の差異について分析する。

4.1 節で見たように、東京方言で複数の wh 要素を含む文では、(19) のように wh 要素の語順をかきまぜによって入れ替えても多少ペアリスト解釈に影響が出るものの文法性に問題が出るほどの変化はない。

(19) 東京方言

- a. 誰が何を持ってきたの？
- b. 何を<sub>i</sub>誰が<sub>t<sub>i</sub></sub>持ってきたの？

複数 wh 要素を含む文の派生には wh 要素がアマルガムを形成してペア・リストを値として出す複合的演算子を作ることが関わりと仮定しよう (Saito, 1994; Takano, 2002, etc.). さらに、このアマルガムは C 主要部から [+F] 素性を付与されると考える。このメカニズムは、次のような派生の過程によって実現される。

まず、C 主要部が右側の (他の wh によって c-統御される) wh 要素に [+F] 素性を付与する。

(28)  $[_{CP}[_{TP} \dots WH_1 \dots WH_2 \dots] C]$   
 $\uparrow$   
 [+F]



許さず、容認性が低い。英語などに見られる「優位性の条件」(superiority)が適用しているように見える。

「優位性の条件」はスペルアウト以前に wh 移動が適用する言語において他の wh 要素を c 統御する wh 要素が移動に選ばなければならないという条件であり、(31b)に見られる現象がこれとは質の異なるものであることは言うまでもない。(31b)の容認性が低いことは、そこに関わる移動の性質の問題であり、それがかきまぜ、すなわち TP への付加ではあり得ないことに起因する。これがかきまぜではあり得ないのは、この移動がペアリスト解釈を不可能にするという意味的帰結を持ち、(24)の一般化に反するからである。

かきまぜでないとしたら、(31b)に見られる移動は焦点移動(focus movement)がスペルアウト以前に起こったものと考えられる。発音に反映される移動に限定して言うと、東京方言などでは名詞句などの左方への移動はかきまぜと焦点移動の可能性がともにあるが、焦点移動の出力のみが発音される形式として表出することはない。後者は素性に駆動される移動(feature-driven)という特性から下接条件(subjacency)などの強い制約を受けるため、下接条件の違反を示すような移動で容認性が高い文はかきまぜによるものであり、それ以外の例ではかきまぜによるのか焦点移動によるのか見分けがつかないのである。<sup>6</sup>焦点移動の出力が表出されるのは焦点移動の後主題化が適用して(Hiraiwa & Ishihara, 2002)分裂文(clefting)が派生される時のみである。従って、(31b)の容認性の低さは東京方言の分裂文(32)の容認性の低さに対応するものである。

(32) \*誰が  $t_i$  持ってきたのは何(を)  $_i$  ですか?

佐賀方言の(31b)ではスペルアウト以前にまず主語の wh 要素がかきまぜによって TP に付加され、目的語の wh は焦点移動によって FP 指定部に移動する。

(33) ...<sub>FP</sub> WH<sub>2</sub> [<sub>CP</sub> [<sub>TP</sub> WH<sub>1</sub> [<sub>TP</sub> ... (WH<sub>1</sub>) ... (WH<sub>2</sub>) ... ]]]

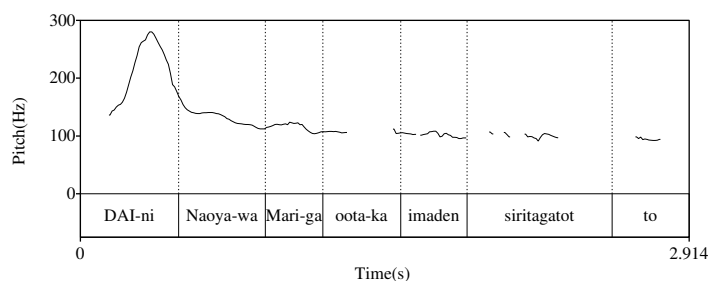
スペルアウト後に WH<sub>1</sub> が FP 指定部に移動しても、独立した移動のため WH<sub>2</sub> と LF でアマルガムを形成できない、さらに佐賀方言は複数 wh 要素を含む疑問文はペアリスト解釈が文法性の条件であると仮定すると、(31b)の非容認性を派生の観点から説明することができる。

## 6. 非難の意味

4.2 節で、(27b)について、通常の発音では Yes/No 疑問文としての解釈のみが可能であると述べた。しかし、この文を有標の読み方で発音すると、異なった解釈が得られる。

<sup>6</sup>かきまぜは wh 要素の場合 TP に付加されることで 1 つ上の C 主要部からのアクセスが可能になり、それによって wh 要素のスコープが広がるという、wh 要素の内在的動機から起こるもので、この意味において素性に駆動される移動ではないと考える。

(27) b'. だいにナオヤはマリが会うたか知りたがととと？



「だいに」に意図的にプロミネンスを置き、文末まで低く保たれ、文末も上がらない（下がる）音調で発話すると、LEPD に似た音調が得られ、また意味解釈も wh 疑問文として容認可能な文になる。

しかしながら、この発音パターンは、東京方言の文 (26b) の LEPD とは異なり、ある付加的な意味が必ず随伴される。それは、(27b') の話者は聞き手に対して非難している、あるいは問い詰めているという意味である。

このことは (27b') の左方移動に伴って著しい意味の変化という帰結があるということで、上で述べた佐賀方言のかきまぜに対する制約の仮説 (24) に照らして (27b') に見られる左方移動はかきまぜではなく、スペルアウト以前に C の投射の上位の位置へ移動したのではないかと考えられる。具体的には FP あるいは Rizzi (1997) のシステムで更に上位にある ForceP の指定部への移動などが考えられる。

Wh 疑問文が非難・問い詰めの意味を持ちうることは東京方言、関西方言でも見られる。

- (34) a. ナオヤはどこへ行ったんだ！  
b. ナオヤは誰と話してるんだ！

(34) の文はそれぞれ「ここにいるべきだ」、「誰かと話しているべきではない」と話者が言っている解釈が可能である。しかし、東京方言、関西方言でこのような解釈が可能なのは wh 要素が主文に現れた時で、wh 要素のいわゆる長距離依存を含むような構文ではこの解釈は不可能である。次の (35) のような wh 要素が補文に現れる文では (35b) のようにかきまぜを適用しても非難・問い詰めの読みは出てこない。

- (35) a. ナオヤはマリが誰に会ったと言ったんだ！  
b. 誰にナオヤはマリが会ったと言ったんだ！

これらの文は話者の怒りと強い疑問を表している文とは読めるが、(34) のような非難の疑問文として解釈することはできない。(35ab) は「誰かに会ったと言うべきではない」という解釈はできない。また、このような非難の疑問文はいわゆる主文現象であり、補文の中では成立しない。



(36) #ナオヤはマリが誰に会ったか (と) 怒っている。

Rizzi (1997) のシステムで C の上位層 Force は主文でのみ投射すると考え、問題の非難の疑問文は Force 主要部が主文サイクルでその領域内にある wh 要素に (8) と同じやり方で Force 素性が付与されると考えると、この問題の主文現象としての性質を捉えることができる。

ただ、このやり方では (16) で示したかきまぜが (継続循環的に) 適用して下のサイクルから上がってきて 1 つ下の CP 内の TP に付加された wh 要素に Force 素性が付与されるのを防ぐことができない。主文のサイクルでマージされた wh 要素に限定する必要がある。

他方、佐賀方言では Force 素性が派生の過程で循環的に付与されるのではなく、Numeration の段階で付与されると考えれば、(27) のような例で PF では FI (に似た) イントネーションを発現し、LF では wh 要素が SpecForceP へ移動することによってこれらの文の意味と韻律に関する特徴を捉えることができる。

## 文献

- Chomsky, Noam (2000). Minimalist Inquiries: The Framework. In Martin, Roger, Michaels, David, & Uriagereka, Juan (Eds.), *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, pp. 85–155. MIT Press.
- Deguchi, Masanori & Kitagawa, Yoshihisa (2002). Prosody and *wh*-questions. In *Proceedings of the Thirty-second Annual Meeting of the North Eastern Linguistic Society*, pp. 73–92.
- Hiraiwa, Ken & Ishihara, Shin'ichiro (2002). Missing Links: Cleft, Sluicing and 'No da' Construction in Japanese. In *The Proceedings of HUMIT 2001. MIT Working Papers in Linguistics*, Vol. 43, pp. 35–54. Cambridge, MA. MIT.
- Ishihara, Shin'ichiro (2004). Prosody by Phase: Evidence from Focus Intonation–*Wh*-scope Correspondence in Japanese. In Ishihara, S., Schmitz, M., & Schwarz, A. (Eds.), *Interdisciplinary Studies on Information Structure 1: Working Papers of SFB632*, pp. 77–119. University of Potsdam, Potsdam.
- Rizzi, Luigi (1997). The fine structure of the left periphery. In Haegeman, L. (Ed.), *Elements of Grammar*, pp. 281–337. Kluwer Academic Publishers, Dordrecht.
- Saito, Mamoru (1989). Scrambling as Semantically Vacuous A'-Movement. In Baltin, M. R. & Kroch, A. S. (Eds.), *Alternative Conceptions of Phrase Structure*, pp. 182–200. University of Chicago Press, Chicago.
- Saito, Mamoru (1992). Long distance scrambling in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics*, 1 (1), 69–118.

Saito, Mamoru (1994). Additional-*wh* Effects and the Adjunction Site Theory. *Journal of East Asian Linguistics*, **3**, 195–240.

Takahashi, Daiko (1993). Movement of *wh*-Phrases in Japanese. *Natural Language and Linguistic Theory*, **11**, 655–78.

Takano, Yuji (2002). Surprising Constituents. *Journal of East Asian Linguistics*, **11**, 243–301.

**Author's web site:** <http://banjo.shoin.ac.jp/~gauchi/>

(受付日: 2012.1.10)